

聖書：Luk. 10:25-37,
『一番大事なもの』

あるとき、主イエスのもとに一人の人がやってきました。その人は律法の専門家、つまり律法というものを常日頃学び、考え、研究している律法学者でした。その人がわざわざ主イエスのもとに来て、律法に関する質問をしたのです。

「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」永遠の命を受け継ぐ、ということは今難しい説明は省いて言えば、本当に救われる、ということです。つまり、本当に救われるには、何をしたらいいのでしょうか、と質問したのです。その場合、何をしたら、というのはユダヤの社会において、律法において、律法のどの掟を守ることが本当の救いを得ることになっていくのですか、という意味でした。

主イエスは質問した人が律法の専門家、律法学者であることを知っていたのでしょう。「律法にはどう書いてあるのですか。あなたはどうかとらえているのですか。」と逆に問い返しました。すると彼は「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。また、隣人を自分のように愛しなさい。」とあります。」とすらすらと、答えるのです。

すると主イエスは、すぐに、「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」と応対されました。

このときの主イエスの言葉のトーンはどんなものだったのでしょうか。どんな表情で、どんな思いでこの人に応えられたのか。「正しい答えだ。それを実行しなさい。」そうだ、あなたの答えは正しい。その言葉通り、さっそく実行しなさい。がんばりなさい、という思いを込めて言われたのでしょうか。しかし一方で、ずいぶん素っ気ない応対のようにも読めます。わかっているんだ、じゃやったら、というような素っ気ない言い方にも聞こえます。

主イエスはどんな思いで、この質問者に対して応対されたのでしょうか。

主イエスが「正しい答えだ、それを実行しなさい。」と言われたとき、この質問者は、はいわかりました、そうします、と答えたのではなく、「では、わたしの隣人とはだれですか。」と尋ねてきた。そこで主イエスは一つのたとえ話で応えられた。それが30節から始まる譬です。この譬えはあまりに有名なたとえで、みなさんすでによく知っている譬ではないか、と思います。しかしあらためて読んでみると、質問してきた律法の専門家にそのままブーメランが戻って

くるようなそういう譬えになっています。

ある人が追いはぎ、強盗に襲われて、自分では起き上がれないほど痛みつけられて倒れていた。そこに、祭司が通りかかったが見て見ぬふりをして通り過ぎていった。次にレビ人が通りかかったが、やはり見て見ぬふりをして通り過ぎた。最後にサマリア人が通りかかり、倒れている人を見て、近寄って手当てをし、自分のロバに乗せ、宿屋につれていき、介抱し、お金まで出して、宿屋の主人にその人のことを頼んだ。譬えはそこまでです。そこで主イエスは律法の専門家にまた問い返す。誰が追いはぎに襲われた人の隣人になったか。律法の専門家がその人を助けた人です、と応えると、あなたも行って同じようにしなさい、と主は言われたのです。

この譬えに登場する人物のうち、強盗に襲われて倒れている人を見て見ぬ振りしたのは、祭司とレビ人です。祭司は礼拝をつかさどる人で、レビ人も礼拝に仕える人。ユダヤ人の中で、律法のことを熟知している人たちです。そして律法の中でも最も大事な戒めが、神を愛し、隣人を愛することであることを誰よりもよく知って理解していた人たちなのです。つまり、質問者である律法の専門家と同じ人たち。そういう人がなぜ、現実に半死半生で倒れている人を見て、通り過ぎていったのか、主イエスは律法の専門家に問いかけているのではないか。神を愛すること、隣人を愛すること、これが最も大事なことだ、ということをよくよく知っている人、どうしてその人が、見て見ぬふりをして通り過ぎていったのか。この譬えに登場する祭司とレビ人がたまたま悪い人、だったからなのか。

そうではないのではないか。主イエスが、このたとえ話で、わざわざ祭司とレビ人を登場させたのは、律法のことを知っている、聖書のことでも理解している。けれど、神を全力で愛することも、隣人を愛することもできない、そういう人間の現実、すなわちわたしたちの現実を、主イエスはこの譬えで取り上げておられるのではないか。隣人愛が大事なことは重々承知している、けれど、自分の眼のまえの人を愛せない、愛していない、愛そうとしない。そういうわたしたちの現実です。

言い方を変えれば、こういうことです。聖書を知っていること、何が大事か、ということを知っているからといって、それを実行できるわけではない、という人間の現実を見据えておられる主イエスがここにおられる、ということなのです。この譬えは単純にサマリア人のようになりましょう、と呼びかけている譬えなのではない。むしろその遙か手前で、わたしは、祭司であり、レビ人であ

る、という現実を見つめることが必要だ、とこの譬えは語っている。さらに、主イエスは聖書を知っているから、なぜそれを実行できると考えるのか、という問いかけがあるようにも思われます。

どうしてこういうことが起こってくるのか、ときには立ち止まってゆっくり考えてみる必要があります。あたまでは、もうわかっているのです。大事なことは、神を全力で愛すること。隣人を自分のように愛すること。しかし、そうしようと思ってもできない。努力が足りない、と言われれば、それは認めるしかないけれど、そもそも愛するということは、努力して到達できるものなのか。

いや、もっと根本的な問題が、あるように思います。

それは、神を全力で愛すること、隣人を自分のように愛すること、そういうことはわたしたちに可能なことなのか。そんなことできるのか、ということなのです。

あたまで愛することが大事だ、ということをごだけ受けとめても、それで人間が愛するようになるのか。

このたとえ話には、サマリア人なる人物が出てきます。この人は、まさに模範的な愛を生きた。だからこの人の名前も出てこないのですが、よきサマリア人と広く言われているのです。しかし、この譬えを聞いて、祭司やレビ人はリアリティがあるのですが、このサマリア人に対して、オイオイ、ほんとにこんな人いるのか、と思ってしまう。正直、ここまでは無理だろう、と思ってしまう。交通事故で倒れている人を見つけて助けることはあるだろう、警察に通報し、救急車を呼ぶこともあるだろう。だが自分のお金まで出して、介抱するかわわれれば、沈黙してしまう。そもそもそこまでしなければならぬのか、と思ってしまう。しかし自分を愛するように隣人を愛することなら、それは当然ということにもなる。

神を愛することについて、ここでは主イエスは直接には語っていないけれど、心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして神を愛する、ということが自分の現実からは全く遠い、ということだけは、よほど図々しくない限りわかるのです。つまり、このたとえ話は、サマリア人のようにあなたもなりましょう、という譬えである前に、何か大きな岩の前で砕け散るような喩え、といっているのだらうと思います。

この譬えには、質問した律法学者に対する批判があって、それは、どんなに律法をよく知っていても、実践が伴わないのなら、何にもならぬのだぞ、という批判なのだ、と解釈する人もいます。わかりやすい解釈です。しかしそう解

積する人が、だからサマリア人のように頑張れ、というだけなら、何もわかっていない、ということにもなるのです。

主イエスは、神を全力で愛し、隣人を自分のように愛せよ、という律法において最も大事なこと、わたしたちが本当に救われるために最も大事なこと、それを生きようとする事において、岩の前で砕けるちるしかない、わたしたちの事を知ってくださっているのではないか。わたしはそう思います。

みんな砕け散る。でもそうですよ。もしこの大事なことをわたしたち一人一人が実際生きえるのなら、世界はすでに変わっています。世の中も、世界も、わたしも変わっています。隣人を自分のように愛しなさい、この言葉がキリストによって語られてから二千年。人間は、この言葉を生きようとして挫折を繰り返してきたのではないか。「正しい答えだ、それを実行しなさい」「行って、あなたも同じようにしなさい。」と主は言われた。しかし努力しがんばれ、とただ単純に言われたのではない。あなたが愛に生きようとするれば、行き詰りも、挫折も、無力感にぶつかることも避けられない。自分のエゴに固執して、愛そうとして愛せない現実にも普通にぶつかる。それは愛することの理解が足りないからでも、努力が足りないからでもない。誰でも祭司やレビ人であるからだ。あたまで考えているときには律法の専門家のように語れたとしても、いざ愛そうと生き始めると、途端に座礁する。人間の愛は破れるからだ。祭司やレビ人である自分を知らなくては。それでもなお、あなたは愛する者として生きるよう神に招かれている。キリストはそう言われているのです。なぜなら、神を全力で愛し、隣人を自分のように愛する、イエス・キリストの十字架の愛であなたが愛されているからだ。愛することにおいて破れていく私たちを愛して、ご自分も十字架において、まさしく破れていくことを厭わずわたしたちを愛しぬいてくださったキリストがおられる。このキリストの愛の中にあることを受けとめて、わたしたちは、行き詰り座礁しても、もう一度、もう少しだけ、そこから、愛することへと招かれている自分を生きるのです。